



日本着物の価値観

桑野 巍

内閣府や日本銀行の最近の調査結果をみると「景況感は上り調子で拡大基調」と答える企業は極めて少ない。多くの企業は「減速気味」と答え、収益低下を案じているようだ。一方、消費動向調査でも消費者の購買意欲が徐々に低下しており「生活必需品が軒並み値上がりしているから」を理由にして、景気の足を引っ張っているらしい。

こうした状態を横目で見ている単細胞男は「資源や食の確保は果たして外国頼みでよいのか」を痛感し「無駄の見直しを考える時」と思うのだ。人間様の食や住にも問題ありだが、衣はどうだろうかに考えが及ぶ。そんな時、着物リサイクル事業で復活した呉服屋3代目社長の話を聞く機会に恵まれた。

日本式着物類の市場は昭和50年のピーク時に年間約2兆円の売り上げを記録したが、バブル崩壊後は衰退傾向が続き、平成18年には5,000億円に縮小、今年約4,000億円を予測している。洋風衣料に比べ、着物は高いし着付けが厄介という固定観念が根付いてしまったのが衰退の原因と彼はいう。今時女性が着物を着るのは結婚式、成人式、子どもの入学・卒業式、七五三、正月などが目に浮かぶが、日本式着物には魅力があるのにと思ったりした。

先々代が京都でスタート、先代が東京に進出、3代目の彼は時代の流れで苦労したらしい。弁舌さわやかな商人の彼は自分の生い立ちを紹介したあと、聴衆の中年女性の一人に聞いた。「着物は好きですか」「着物を着たいですか」「この一年間に着物を買いましたか」「この一年間に着物を着ましたか」の4問だった。指名された女性はまわりを見ながら前段の2問はイエス、後段2問はノーと答えた。彼はありがたいと礼を言ったあと「私が思ったとおり」とコメントし「ではお宅のタンスに着物はありますか」と続けた。真面目な女性は「かなり」と答え、会場に笑いが起こった。

その時わが家では…が頭に浮かんだ。貧乏所帯のタンスの中や嫁いだ娘のタンスの中にも高価(?)な着物類があるはず、彼女たちの着物姿を見たのはいつの日だったのだろう。高級品とか高価であるとか

は別にして、嫁入り着物はいまや“タンスの肥やし”になっているだけでなく“無用の長物”化している。

壇上の彼は話を続けた。「私の推定では日本の皆さんのご家庭には最低40兆円の着物類が眠っている」と話し、会場からは「へえー」という嘆息がもれた。その昔は着物は高級な質草といわれたが、いまは邪魔者で無駄な長物なのか。もっとも呉服市場は裾野が広く、生地を生かすチエから多角的に利用活用されているとも聞かすが、二次利用だけでなく三次、四次利用を望みたい。

着物類をレンタルで身につける若い女性も多いと聞かすが、彼女たちは必ず「着物もいいよね」と日本文化を評価するものの、実は自分自身で着ることができる人はほとんどいないらしい。着付けができる人は教室で習っている家庭人を含めても約30万人で、決して多くはなく、これが呉服市場成長の阻害要因になっているようだ。

「呉服業界では古着屋も含めて売上増を図り健全市場の再建を試みているけれども、全体的には前途が明るいとはいいいない」と彼はいう。新品も不調だし、古着も不振らしい。特に古着は「暗い、臭い、汚い」のイメージが日本女性にしみついているので、彼は「洗いの対策」を中心にこれを払拭し、流通面も改革しているという。そこで中古書販売チェーン店をヒントにして“着物リサイクル屋”を立ち上げ、小店舗チェーン、少人数配置で新市場を確立、着物衰退からの脱出を図っているというのだ。

とはいえ、この業界では「着物の生産、流通企業はいつ倒産してもおかしくない状態」が長く続き、今も救世主が現れていない。人間生活に衣料は必要不可欠だが、今、物を減らしてすっきり暮らそうというシンプルライフの時代、しかも若者人口が減り続けるし、われわれの日常生活の中で着物に対する日本人固有の価値観を評価する人が増えるかどうか。モノの値段や消費量、ぜいたくさや節約度を考えさせられた。

(自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長)